

2018/1/30

うときゅういっきの英語夜話（ことば夜話）

国の数だけ英語はある。No problem



カナダ人のある友達に

「アジア人の英語は、口の中に定規を入れたみたいな発音なので、聞き取りやすいが、欧米人の英語は巻き舌なので聞き取りにくい。なので、どうしても欧米人と話すより、アジア人と話してしまう。聞き取りやすいからだ」

という、そのカナダ人からは、それに対する正確な対位法に基づかない答え方で

「国の数だけ英語はある。心配いらぬ。ノー・プロブレムだ」

というお返事が返ってきました。

それを聞いた時の自分の感想は

「どうやら、世界は「アバウト」にできているようだ。世界の人は大らかなんだ」
でした。

ところが、日本の学校での英語教育は、対局的に全然アバウトではなく

「完璧な英語が話せないうちは、しゃべっちゃダメ！！一つでも間違えたら、タッチアウト。世の中からお払い箱の村八分になるぞ！！」

で、最初の第一声すら出すことを子供たちに躊躇わせる（ためらわせる）「脅し教育」のような気がしてなりません。

でも、そうなるのも仕方ないかもしれません。だって今の学校の英語教育は受験教育だからです。特に塾は。

イメージとしては、以下のような感じです。

子供たちは、体育館の中にある、幅10センチの平均台の上を「踏み外したら、下に落ちる。落ちたら減点だ。と、平均台の後ろからナイフを背中に突き付けられて、恐る恐る前に進んでいる。

そんなイメージなのです。

ところが、それは「平均台の上を歩いていると、思っている、或は思い込まされている」本人にしか見えていない光景で、その映像をカメラが一挙に鳥の目になって引くと、周りからは、

「体育館はこんなに広くて駆けまわれるのに、なんであの子は、まるで平均台の上を歩いているかのように、細くて狭いところを恐る恐る前に進んでいるんだ？妙なやつだな」という事になります。

このカメラのパンした映像こそ、以前欧米人が語った

「日本人は英語で話しかけるとみんな逃げてしまう。日本人はみな、対人恐怖症か何か、なのか？」

という彼らの目に映った日本人の姿なのです。それを譬えると上の文章のようなことになっているのではないか？と思うのです。

では、なぜ、アジア人、欧米人を含めた諸外国の人たちは、中学三年間程度の期間で英語がしゃべれるようになるのか？

それは、想像するに、日本の英語教育は、そこを通過してしまえば、あとはどうでもいい「受験の必須アイテム」でしかないなのに対して、諸外国の英語は、まさに「生活の必需品」だからではないでしょうか。

学校では「脅しの受験英語」なのとは反対に、一歩街に出れば話せなくても「全然困らない」環境なのに対して、諸外国では、「受験さえ通ってしまえば、あとはどうでもいい」どころか、話せないと暮らせない。その日から「おまんま」の食い上げ、になる、毎日毎日続く「生活英語」だからではないでしょうか。

なので、完璧な英語が話せるまで、なんて待ってられない。生きていくためには多少の文法的間違いなんて気にしてられない。

それがお互い話す方も聞く方もちゃんとわかっているから「アバウト、当たり前。ノー・プロブレム、ドン、ウォーリィ、ネバー、マインド、Please speak what you want to say」で許し合い、認め合う、なのではないでしょうか？

多分、この「テキトーでいいから、とにかく話始める」或は「話始めるしかない」

これが自分は、何よりも大切な気がするのですが。

まずはとにかく、間違ってもいいから、その「重たい口を開いてみる」こと、「声を出してみる」こと。

それが何よりも、一番肝要なことだと思った次第なのです。